神魔の素質を持つ物も異世界から来るそうですよ？

リフェア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ルガリニオその世界には箱庭の世界と同じく修羅神仏や悪鬼羅刹などが居た。

星導覇瑠徒その世界で生まれた彼は１０年前までは普通の人間だった。

だが出会ってしまった、箱庭の世界では最悪の天災と呼ばれる魔王にそしてその時、動き出した神魔を超越する未来の歯車が。

そんな覇瑠徒が箱庭に来る話

※注意※

この作品は素人が趣味程度で作った物です。

目次

プロローグ ―― 1
1話 問題児達の集結 ―― 5
2話 箱庭世界のルール ―― 12
3話 星導覇瑠徒の恩恵 ―― 17
4話 二人の問題児 ―― 23
5話 黒ウサギ達のコミュニティ ―― 27
6話 魔王 ―― 31
7話 問題の解決 ―― 36
8話 悪を裁く理由 ―― 39
9話 違う世界と立ちはだかる壁（笑） ―― 43
10話 白夜叉 ―― 48
11話 ギフトネーム 前編 ―― 52
12話 ギフトネーム 中編 上 ―― 58
13話 ギフトネーム 中編 下 ―― 62
14話 ギフトネーム 後編 ―― 68

プロローグ

とある場所・円卓の間会議室

「で、どうして俺たちが呼ばれたんですかヴァルザーさん。」
「君たち８人を呼んだのは、ほかでもないそろそろハルトくんが、僕の足元くらいまで強くなってきたからさあの事について話そうかなと」
「あの事って言ったって、俺まだ１５ですよ」
「年齢なんて関係ないと思うけどな」
「せめて５年待って下さいよ。」
「そうだよパパまだ色々問題あるし、まだいいじゃん。」
「えっロアまでそんな事言うの、ガッカリだなー残念」
「ねえ、ヴァルザーそんな事のために私たち呼んだの？それなら帰るけど」
「そうですよ、僕暇じゃないんですけど」
「すまないね、メイにイオ話がそれてしまった」
「本題に入るよ」

「数時間前、預言神が新たな予言を書き記した」
「なんだと、さっさと話せよヴァルザー」
「相変わらずベル君は、五月蠅いな」
「今か言うから静かにしてね」

『古の時、分かれたれた二つの道今この時より新たな関係を得るであろう』

「なんか微妙ですね。」
「私もそう思う」
「ニックとヘーグは、無関心ですね。」
「こんな事で私らを呼んだのかよ、クソオヤジ」
ロアの口調が変わった
ロアと言う存在は、二重人格である。
一般的な彼女は、何処にでもいる普通の女の子である、だがしかし性格が変わると彼女の口調は、悪くなりオラオラな女子になるのであった。
「変わってるぞロア」
「あっごめんなさい、まだ上手くコントロール出来なくて」

「まっ最初からそうだったし気にしないけど。」
「せっかくの新しい予言なのにみんな反応がイマイチだね」
「仕方ないですよヴァルザーさん、今まであったのが世界の危機的なことだったし」
「そうなんですよ今までが強すぎますよ」
「ある時は僕たちが居る星の１０倍の隕石がぶつかるそうになったり、またある時は巨大悪の組織が世界征服しようとしたり」
「今回は、以前に比べてショボイですよ。」
「しょぼいかーそれは、仕方ないね。」
「そうゆうことは、俺興味ないから帰るわ。」
「私もいいや、じゃバイバイ。」
「じゃあ僕も失礼いたしました。」
「・・・」
「わたくしも失礼します。」
「俺も失礼いたしました。」
「じゃあ私もバイバイ、パパとハルト」
　そう言ってハルトとヴァルザー以外がその場から姿を消した。
「ロアまでどっかいっちゃたよ」

「まあ仕方ないですよ、何かあったら動くって事で」
「って　ヴァルザーさんもどっか行ったよ」
「なんで俺だけ転送術使えないかなー」
　その時だったテーブルの上に封書がある事にきずいたのは、その封書には星導覇瑠徒様と書いてあった。
「いつの間にこんな物がしかも俺の名前が書いてあるし」
「俺、宛だから読んでもいいか」
　そしてハルトはその紙に書いてある文章を読んだ。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。
　その才能を試すことを望むならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの箱庭に来られたし』
「なっ」
　視界が間を置かずに開けた。
「何処だここ⁉」

1話　問題児達の集結

「何処だここ」

上空４０００ｍほどの位置にいた、落下しながらも覇瑠徒（ハルト）は周りの状況を確認した。

（人が三人と猫が一匹か）

「あれ、力が使えないどうゆうことだ？」

覇瑠徒は、本来使えるはずだった飛行術で周りの人たちを助けるはずだったが、何故か力が使えなかった。

（他のも使えない、そうかあの紙に書いてあった『己の家族を友人を財産を世界の全てを捨て』そうなると大変な事になる）

直後覇瑠徒は、落下地点にあった湖に落ちた。

水膜で勢いが衰えいたため四人は無傷で済んだが女の子と一緒に落ちた猫は大変そうだった。

覇瑠徒を含めた他の三人はさっさと陸地に上がりながら、それぞれが罵詈雑言を吐き捨てていた。

「し、信じられないわ！　まさか問答無用で引き摺りこんだ挙句、空に放り出すなんて！」
「右に同じだクソッタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」
「さらに右に同じだクソ野郎。普通に考えて上空がスタート地点って殺しに来てるぜこれ。それと石の中はやめとけ」
「なぜだ？」
「経験者だからだ。」
「どんな感じだった」
「話したくない」
「石の中に居たら動けないでしょう？」
「俺は問題ない」
「俺はどうにかしようとしたけど、無理だった」
「貴方、その後どうしたの？」
「石に入れてくれた方が助けてくれたよ」
　三人はそれぞれ湖に落ちて濡れた服を絞った。その後ろで猫を助けた女の子が、
「此処・・・どこだろう？」

「さあな。まあ、世界の果てっぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」
「俺達知ってる世界じゃないってことは分かるな」
「まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」
「そうだけど、まずは〝オマエ〟って呼び方を訂正して。私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、そこの猫を抱きかかえている貴女は？」
「春日部耀。以下同文」
「そう。よろしく春日部さん。」
　その後、逆廻十六夜が自己紹介していたが覇瑠徒は考えていた。
（力が使えないと言う事はあいつらが俺にしたやつが解除されているかもな）
「何を考えてたかは知らんが次はお前の番だぞ」
「俺の番か、俺は星導覇瑠徒」
「よろしく覇瑠徒くん」
「ああ、よろしく飛鳥に耀に十六夜」
「おう、よろしくな覇瑠徒」
「・・・よろしく」
＊
「で、呼び出されたのはいいけどなんで誰もいえんだよ。この状況だと、招待状に書かれ

ていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」
「そうだよな、俺たちが湖に落ちて岸辺上がった時に目の前に現れてるのが普通だと思う。それと説明する人は人間じゃないかもな」
「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」
「この状況に落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」
「これぐらいでパニックしてたら俺のいた世界では生きていけないぞ」
「そんなにやばいのか覇瑠徒のいた世界は」
「まあ、今よりは」
「ここでじっとしてる訳にはいかないからあそこの物陰に隠れてる兎に話を聞こうぜ」
覇瑠徒が指した方向で何かが跳ね、四人の視線が集まる。
「なんだ、貴方も気づいていたの？」
「俺達空から落ちてきただろうが、上から丸見えだったし十六夜もか？」
「当然。だが覇瑠徒はよく落下中に見えたな、そっちの猫を抱いてる奴も気づいていたんだろ？」
「風上に立たれたら嫌でもわかる」
「色々あって目が良いからな」
「面白いなお前ら」

四人は理不尽な招集を受けた腹いせに殺気の籠った冷ややかな視線を兎に向ける。
「や、やだなあ御四人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじゃいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穏便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」
「断る」
「却下」
「お断りします」
「いいけど、君の心臓と交換ね」
「あっは、取りつくシマもないですねというか最後の言葉が物騒ですね♪」
バンザーイ、と降参のポーズをとる黒ウサギ。
しかしその眼は冷静に四人を値踏みしていた。
（肝っ玉は及第点。この状況でＮＯと言える勝ち気は買いです。まあ、扱いにくいのは難点ですけどもてか最後の方何ですか！心臓と交換って物騒すぎますヨ）
黒ウサギはおどけつつも、四人にどう接するべきか冷静に考えを張り巡らせていると春日部耀が黒ウサギの隣に立ち、黒いウサ耳を根っこから鷲掴み、
「えい」

「フギャ！」
　力いっぱい引っ張った。
「ちょ、ちょっとお待ちを！　触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どうゆう了見ですか⁉」
「好奇心の為せる業」
「自由にも程があります！」
「当然の結果」
「当然の結果とはどうゆう事ですか！」
「俺たちを呼んだのにずっと隠れてたじゃん」
「それはタイミングが悪くてですね」
「へえ？　このウサ耳って本物のなのか？」
　今度は十六夜が右から掴んで引っ張る。
「・・・。じゃあ私も」
「俺の引っ張る耳がないぞ」
　と言って覇瑠徒は、黒ウサギのほっぺたを突っついた。
「ちょ、ちょっと待ってーーー！」
　今度は飛鳥が左から。左右に力いっぱい引っ張られ、ほっぺたをプニプニされた黒ウ

サギは、言葉にならない悲鳴を上げ、その絶叫は近隣に木霊した。

そうして、色々あって問題児達が集結した。

2話　箱庭世界のルール

「あ、あり得ない。あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきっとこのような状況を言うに違いないのデス」
「黒ウサギを堪能してたら時間が過ぎ去ってしまった。不覚だ」
「覇瑠徒も楽しんでたじゃねーか。」
「故にだと言うかさっさと話してくれ、まだ何も始まってない気がする。」
　半ば本気の涙を瞳に浮かばせながらも、黒ウサギは話を聞いてもらえる状況を作ることに成功した。四人は黒ウサギの前の岸辺に座り込み、彼女の話を『聞くだけ聞こう』という程度には耳を傾けている。
　黒ウサギは気を取り直して咳払いをし、両手を広げて、
「それではいいですか、御四人様。定例文で言いますよ?言いますよ?さあ、言います！
　ようこそ、〝箱庭の世界〟へ！　我々は御四人様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼンさせていただこうかと召喚いたしました！」
「ギフトゲーム?」

「そうです！既に気づいていらっしゃるでしょうが、御四人様は皆、普通の人間ではございません！その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその〝恩恵〟を用いて競いあう為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

両手を広げて箱庭をアピールする黒ウサギ。

で、その後黒ウサギが言ったことをまとめると。

この箱庭で生活するにはコミュニティと言うものに入る必要があるらしい。

そしてギフトゲームには主催者がいて、その主催者は暇を持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催することやコミュニティが力を誇示するために独自開催すると言うものがあって、

前者は主催者が修羅神仏なだけあって難しいらしいでもその分報酬はでかく、場合によっては新たなギフトが手に入るらしい。

後者は参加のためにチップが必要であり、チップは金品・土地・利権・名誉・人間それとギフトを賭けあうこともできるらしい、当然ながら勝てば奪えて負ければ自分のギフトは失うと愛嬌たっぷりの笑顔で言われた。

「ゲームそのものはどうやったら始められるの？」

飛鳥が質問した。
「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期日内に登録していただければＯＫ！商店街でも商店が小規模のゲームを開催してるのでよかったら参加していってくださいな」
「・・・つまり『ギフトゲーム』とはこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら？」
「ふふん？中々鋭いですね。しかしそれは八割正解の二割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品の物々交換も存在します。ギフトを用いた犯罪などもってのほか！そんな不逞な輩は悉く処罰しますーーーが、しかし！『ギフトゲーム』の本質は全く逆！　一方の勝者だけが全てを手にするシステムです。」
「そう。中々野蛮ね」
「ごもっとも。しかし主催者はすべて自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰ぬけは初めからゲームに参加しなければいいだけの話でございます。」
黒ウサギは一通りの説明を終えたのか、一枚の封書を取り出した。
「さて。皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭の世界における全ての質問に答える義務があります。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな同士候補である皆さんを何時までも野外に出しておくには忍びない。ここから先は我ら

のコミュニティでお話させていただきたいのですがよろしいです？」
「待てよ。まだ俺が質問していないだろ」
「俺もしていないぞ、先にしていいか十六夜？」
「そうだったな先にいいぞ覇瑠徒」
　清聴していた十六夜と覇瑠徒が威圧的な声を上げて立つ。ずっと刻まれてきた軽薄な笑顔が無くなっていることに気づいた黒ウサギは、構えるように聞き返した。
「どういった質問です？ルールですか？ゲームそのものですか？」
「とは、言っても俺は質問と言うより確認だな、この世界にも神や悪魔はいるんだな」
「ＹＥＳいますよ」
「じゃあもちろん善と悪の争いもあるよな？」
「ええ、ありますよと言うかどんな世界にもある当たり前では？」
　黒ウサギは焦ったこのままだと自分自身に起きている事に対して質問されるのではないかと
「それはそうだったな、知りたかったことは分かった、十六夜番どうぞ」
「俺はルールとかゲームそのものなんてどうでもいい」
　十六夜は一言
「この世界は面白いか？」

「ＹＥＳ『ギフトゲーム』は神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

3話　星導覇瑠徒の恩恵

色々あった覇瑠徒達は黒ウサギに言われた通り何時までも外にいるのは忍びないないので黒ウサギのコミュニティに向かっていた。
「なあ覇瑠徒」
「なんだ十六夜？」
「世界の果て見に行かないか」
「世界の果てか・・・・・面白そうだないいぞ行こうぜ」
「よし、決まりだな」
「じゃあ飛鳥と耀、黒ウサギに聞かれたら〝ちょっと世界の果てを見てくる〟って言っといてくれ」
「分かったわ」
そう言って覇瑠徒と十六夜は世界の果てを見に行った。
「覇瑠徒って凄いな」
十六夜と覇瑠徒は今世界の果てを見るためにその途中にある森を駆けていた
「どういうことだ？」

「俺と同じ速度で走ってるからさ」
「そんな事か」
「今まで無かったことだからな」
「十六夜のいた世界はそんな世界だったのか？」
「俺より凄いやつは多くはなかった」
「ふーんそうか、まあでもこれぐらいでそんなこと言われてもな」
「そんなことって結構凄いと思うけどな」
「今は俺の身体能力だけだからな、ここに来る前は空を飛ぶ事もできたし」
「空飛べたのかそれは凄いなでも今できないのはなぜだ」
「正しい事は分からんが多分招待状に全てを捨て箱庭に来いって書いてあったからだと思う」
「と言うと空を飛ぶのは自分の力じゃないのか」
「ああ、契約して使えてただけだからな」
「覇瑠徒の世界は契約すれば空を飛べるのか、凄いじゃねえか」
「人によるけどな、そろそろ森を抜けるぞ」
　森を抜けるとそこには大河があった。
「世界の果てにはもうちょっと掛かりそうだな」

「そうだなじゃあスピード上げるけどいいか？」
「ああ、問題はないだが普通に行ってもつまらないから競争しないか？」
「それいいな、じゃあそうしようぜ」
　その時、目の前に身の丈三〇尺強はある巨躯の大蛇が現れた。
『貴様ら何しにここに来た？』
「うわーでかいなこのミミズ」
「そうだなミミズにしてはでかいな」
『貴様らふざけてるのか！』
「真面目にふざけてるよ、なあ十六夜」
「ああそうだな真面目にふざけてるよ」
　覇瑠徒と十六夜は楽しげに目の前にいる大蛇を挑発した。
　その挑発に易々とのってしまった大蛇が周りに水で竜巻を四つ作り出し怒りを露にした。
『ちょうどいい試練を与える、貴様らにみせてやる我が力を』
「だそうですけど、どうする十六夜あの蛇多分神の一種だよ」
「試練って言ってるから倒した方がいいんじゃないか？」
「じゃあ任せた」

「任せたってお前は戦わないのか」
「えーだっていま戦ったら俺死んじゃう」
「えっ、お前俺のスピードには追い付いたのにあんな奴は無理なのかよ」
「あんな奴って蛇神だと思うけど、まあとにかく先に十六夜が戦って良いよ少ししたら俺も戦うからさ」
「わかった早くしろよ覇瑠徒の力見たいからな」
「ＯＫ、早くする」
『貴様ら何をぐずぐずしている、まさか怖気づいたか？』
「すまないな蛇神様ちょっと話し合いをして俺か先になった、だからいくぞ蛇神」
　そう言って十六夜が跳躍して蛇神に向かって行った。
『人間ごときが我に一人で挑むとは後悔させてやる』
　こうして十六夜と蛇神の戦いが始まった
「さすがに十六夜は一人でも大丈夫そうだな」
　その時覇瑠徒に向かって声が聞こえてきた。
『俺達の出番か？』
「やっぱりお前たちの封印は解かれてたか」
『ああ、急にだったけれどまさか覇瑠徒が別の世界に行くとは』

「それは俺も驚いた、だがお前達どれだけ俺に迷惑かけたと思っていやがる」
『あの時はすまなかった』
『でも俺達だって困ったんだからな』
「えっなんで？」
『だって実際俺が自分の家でごろごろしてたら、急に入って来たんだから』
『俺だって急に今日からここお前の家だからって入ってみたらあいつが居たんだからな』
「おいおい、お前たち俺の体を家扱いしないでくれますかねえ」
『まあとにかく今は俺たちの力が必要なんだろ』
「ああそうだった、じゃあ力貸してくれよ」
『それについてだが魔王の方は大丈夫なんだが神の方が一からやり直しになったから』
「は？マジかよ俺が積み上げたものは何だったんだよ」
『まあ一回封印されたから仕方ないな、それなりに使えるようにしたから頑張って一から始めようぜ』
「分かった」
『まっ頑張れよ』
　覇瑠徒は会話が終わって目の前の景色を見ると来た時と一変していた。

「なに独り言、言ってるんだ覇瑠徒」
「独り言じゃねーよ、まあとにかく準備は終わったから俺の番だな」
「よし、見せてくれ覇瑠徒の恩恵（ちから）」
「見せてやるよ神魔の力」

4話　二人の問題児

　覇瑠徒が自分の力を使って蛇神を倒そうとした時、十六夜と出てきた森から黒ウサギが出てきた。
「あれ、お前黒ウサギか？どうしたんだその髪の色」
「イメチェンか？そうだとすれば、似合っているぞ」
　黒ウサギの髪の色が最初に見た艶のある黒い髪とは違い淡い緋色になっていた。そして黒ウサギは散々振り回されたが故、怒りが頂点に達していた。
「もう、一体何処まで来ているんですか⁉」
「〝世界の果て〟まで来ているんですよ、っと。まあそんなに怒るなよ」
「俺と十六夜がいなくなった事にきずかなかった黒ウサギもどうかと思うけどな」
「覇瑠徒さんが私に言ってくれれば私が怒る事なんて無かったんですよ」
　世界の果てに行くとき黒ウサギには何も言わなかったが物音を立てず行ったわけでは無く、多少は騒がしかったのにそれにきずかなかった黒ウサギも黒ウサギであると思った覇瑠徒であった。
「しかしいい脚だな。遊んでたとはいえこんな短時間で俺達に追いつけるとは思わな

かった」
「むっ、当然です。黒ウサギは〝箱庭の貴族〟と謳われる優秀な貴種です。」
「へーそうなんだ、凄そうには見えないけどな」
「それは覇瑠徒さんの見る目がないだけデスヨ」
「ま、まあ、それはともかく！十六夜さんと覇瑠徒さんが無事でよかったデス。水神のゲームに挑んだと聞いて肝を冷やしましたよ」
「水神？・・・ああ、あのでかい蛇のことかやっぱり神様だったか」
　え？と黒ウサギは硬直する。覇瑠徒は十六夜が戦っているのを見ていなかったため今水神が何処にいるのか知らなかったため十六夜に聞いた。
「今何処にいるんだ？」と聞いたら十六夜が指した川面にうっすらと浮かぶ白くて長いモノがあった。
　そして黒ウサギが理解する前にその巨体が鎌首を起こし、
『まだ・・・・まだ試練は終わってないぞ、小僧ォ‼』
「蛇神・・・！ってどうやったらこんなに怒らせられるんですか十六夜さん!?」
　ケラケラと笑う十六夜は事の顛末を話す。
「なんか偉そうに『試練を』とかなんとか、上から目線で素敵なこと言ってくれたからよ。俺を試せるのかどうか試させてもらったのさ。結果はまあ残念な奴だったが。」

「十六夜だけを悪く言うのはやめてくれそれと十六夜は話をカットしすぎだ、俺の立場から話すと森を抜けた後あのデカい蛇が現れたから戦ってみたいなーって思って挑発したんだよそしたら『試練をくれてやる』とかだったかな?で今ココ」

『貴様・・・付け上がるな人間!我がこの程度の事で倒れるか!!』

蛇神の甲高い咆哮が響き、牙と瞳を光らせる。巻き上がる風が水柱を上げ立ち昇る。

「十六夜さん、下がって!」

黒ウサギが庇おうとするが、十六夜の鋭い視線はそれを阻む。

「何を言ってやがる。下がるのはテメェだろうが黒ウサギ。これは俺らが売って、奴が買った喧嘩だ。手を出せばお前から潰すぞ」

本気の殺気が籠った声音だった。十六夜の言葉に蛇神は息を荒くして応える。

『心意気は買ってやる。それに免じ、この一撃を凌げば貴様の勝利を認めてやる』

「寝言は寝て言え。決闘は勝者が決まって終わるんじゃない。敗者を決めて終わるんだよ」

求めるまでも無く、勝者は既に決まっている。

その傲慢極まりない台詞に黒ウサギも蛇神も覇瑠徒も呆れて閉口した。

『フンーーーその戯言が貴様の最期だ!』

蛇神の雄叫びに応えて嵐のように川の水が巻き上がる。竜巻のように渦を巻いた水

柱は蛇神の丈よりも遥かに高く舞い上がり、何百トンの水が吸い上がった。
その時だった覇瑠徒が動いたのは
「貴様ら俺を忘れてないか？」
覇瑠徒の声には覇気があったその声で周りの人の動きが止まったそれには蛇神も含まれていた。
「どうした覇瑠徒？急にそんな事言って」
「十六夜が言ったじゃねーか、俺の力見たいって」
「そうだったなでも今は俺があいつをかっこよく倒す所じゃねえか」
『貴様らまた我を除けるのか‼』
「面倒だなまとめてぶっ飛ばしてやる」
そして覇瑠徒は禍々しさと神々しさが混ざったオーラをまとい、蛇神が作り出した水柱よりも高く跳躍して真下に向かって強烈な一撃を放った
「破壊の衝撃（デストラクションインパクト）」

5話　黒ウサギ達のコミュニティ

　覇瑠徒が放った衝撃にぶつかった水の竜巻は消滅し真下にいた蛇神と黒ウサギと十六夜にぶつかろうとしていた、十六夜と黒ウサギは避けて大丈夫だったが蛇神は巨躯だったため避けられず直撃してしまった。衝撃がぶつかった蛇神は数メートル吹き飛び川に落下した、またその衝撃で川が氾濫し水で森が浸水した。
「ちょっとやりすぎたなこれ、本気でやったわけじゃないのにこんな事になるとは」
　覇瑠徒は蛇神や十六夜達を倒そうとしてやったわけでは無くただ一発殴ってやろうという気持ちで衝撃を放ったのにこうなるとは思っていなかった。
　そして高く跳躍してしまった覇瑠徒は後悔していた。
「高く飛びすぎたなこのまま自由落下するか？いや痛いぞこれ仕方ないがあいつの力で」
　その時覇瑠徒は知った高く跳躍したのとその後に撃った衝撃で力を使い切った事につまり覇瑠徒の力は今は有限であった。故に今覇瑠徒は本当にただの人間でありそのただの人間が数十メートルの上空から落下するのであった。
「死ぬのか俺いや今までを思い出せこんなことで死ぬほど軟じゃないてかこれ自分で走

馬灯をやってないか、何やってんだよハルトーー」
そんな事を言いながら覇瑠徒は真下に落下した。
そんな様子を十六夜と黒ウサギは見ていた。
「覇瑠徒のやつあの蛇倒したのに自由落下してるぞ大丈夫かあれ」
だが黒ウサギの頭の中はパニックでもうそれどころではなかったのだ。
（一瞬見えましたが覇瑠徒さんから出てたあのオーラは神格のような気がしました。でも黒くて禍々しいのも出ていましたあれも神格なのでしょうか？ですがそれで神格を持っている蛇神を倒しました凄いのです。）
黒ウサギは内心興奮していた。（これで私達のコミュニティ再建も、本当に夢じゃないかもしれない。）
だが内心興奮していた黒ウサギも覇瑠徒が落下してきたのを見てそれどころじゃなくなった。
「覇瑠徒さん大丈夫でしょうか」
覇瑠徒は落下したがドーンとかグキッのような音はしなかった。
「あぶねえ危うく死ぬとこだった」
「大丈夫か覇瑠徒」
「いやー何とか無傷で落ちれた」

　覇瑠徒は無傷だったしいていえば川に落ちたので服が濡れていた。
「服がびしょびしょで最悪なんだけどね」
「大丈夫ですか覇瑠徒さん」
「ああ、大丈夫だ黒ウサギ」
　何事も無かったように会話しているが覇瑠徒には川に落ちる寸前にどこからか誰かの声が聞こえていた「いきなりこんな事になってるとは驚きましたよ覇瑠徒様ここは私が何とかしますから安心して下さい。」と言う声が覇瑠徒には
「覇瑠徒さんが無事なのは安心しましたが蛇神様は生きてます?」
「あれぐらいで死ぬほど弱くはないだろ。」
「ならギフトだけでも戴いておきましょう。ゲームの内容はどうであれ、覇瑠徒さんは勝者です。蛇神様も文句はないでしょうから」
「おいちょっと待て黒ウサギこの場合俺が最終的にあの蛇神を倒したから、俺が勝者なのか?」
　黒ウサギは思い出したように補足した。
「はいそうですね。神仏とギフトゲームを競い合う時は基本的に三つの中から選ぶんですよ。最もポピュラーなのが力と知恵と勇気ですね。力比べのゲームをする際は相応の相手が用意されるものなんですけど覇瑠徒さんはご本人を倒されましたから。きっ

と凄いものを戴けますよー。これで黒ウサギ達のコミュニティも今より力を付ける事が出来ます♪」

黒ウサギが小躍りでもしそうな足取りで大蛇に近寄る。

しかし十六夜は不機嫌な顔で黒ウサギの前に立った。

「な、なんですか十六夜さん何か気に障りましたか？」

ふっと十六夜の軽薄な声と表情が完全に消える。応じて黒ウサギの表情も硬くなる。

「オマエ、なにか決定的な事を隠してるよな？」

「十六夜こんな時に言うのかよ俺も薄々は感じていたけど、どうせこの箱庭にいるあくどい連中に負けて黒ウサギ達のコミュニティが大ピンチなんだろ」

6話　魔王

「黙ってたら何にも分からないぞ黒ウサギ」
　覇瑠徒の言葉に驚きと少しの恐怖を感じた黒ウサギだった。
「おい覇瑠徒、俺が今かっこよく決めるところだったのに何横取りしてるんだよ」
「純粋に俺も気になってたけどこんな所で言う必要は無いから、十六夜が急に言うから驚いたんだが」
「まあ、そう言われるとそうだなでどうする黒ウサギ？」
「分かりましたその事については話します。ですがその前に覇瑠徒に質問していいですか？」
　黒ウサギは知りたかった何故あのようなほぼ正解な答えが出せたのか。
「何の質問だ？」
「覇瑠徒さんは何故分かったのですか？」
「と言うと当たってたんだな」
「はい、ほぼ正解です。」
「よし、じゃあ話そう黒ウサギに善と悪の争いがあるかと質問しただろその時黒ウサギ

は普通に答えたつもりだがそれはこの箱庭のルールを悪用するやつがいるって事を証明したということだ。即ちそれはそういう存在を知ってるって事だ。そして俺達を何故呼んだのか?それで答えを求めた結果でたのがさっき言ったことだ」
「覇瑠徒は黒ウサギが俺達を呼んだ理由を知りたかったんだな」
「まあ、そういうことだな」
「そういう事でしたか」
「では、話してもらおうか黒ウサギ」
　十六夜と覇瑠徒は川辺にあった手ごろな岩に腰を下ろして聞く姿勢をとる。しかし黒ウサギにとって今のコミュニティの状態を話すのはあまりにもリスクが大きかった。
「ま、話さないなら話さないでいいぜ?俺はさっさと他のコミュニティに行くだけだ」
「え、十六夜は他のコミュニティに行くのか」
「黒ウサギは俺達にとんでもない事実を隠してたってことはだ。俺達にはまだ他のコミュニティを選ぶ権利があるってことだ」
「・・・・話せば、協力していただけますか?」
「ああ。面白ければな」
「俺は協力する気が無かったならすでに此処にはいないのだが」
「分かりました。それではこの黒ウサギもお腹を括って、精々オモシロオカシク、我々の

コミュニティの惨状を語らせていただこうじゃないですか」
「まず私達のコミュニティには名乗るべき〝名〟がありません。よって呼ばれる時は名前の無いその他大勢、〝ノーネーム〟という蔑称で称されます」
「名前が無い＝その他大勢か」
「へえその他大勢扱いかよ。それで？」
「次に私達にはコミュニティの誇りである旗印もありません。この旗印というのはコミュニティのテリトリーを示す大事な役目も担っています」
「コミュニティって一つの国みたいな物なんだな」
「そう言われるとそうですね」
「ふうん？それで？」
「名と旗印に続いてトドメに、中核を成す仲間達は一人も残っていません。もっとぶっちゃけてしまえば、ゲームに参加できるだけのギフトを持っているのは一二二人中、黒ウサギとジン坊っちゃんだけで、後は十歳以下の子供ばかりなのですヨ！」
「もう崖っぷちだな！」
「そして絶望的」
「ホントですねー♪」
十六夜と覇瑠徒の冷静な言葉にウフフと笑う黒ウサギは、ガクリと膝をついて項垂れ

る。口に出してみると、本当に自分達のコミュニティが末期なのだなーと思わずにはいられなかった。

「で、どうしてそうなったんだ？黒ウサギのコミュニティは託児所でもやってんのか？」

黒ウサギは沈鬱そうに首を振る。

「いえ、彼らの親も全て奪われたのです。箱庭を襲う最大の天災〝魔王〟によって」

〝魔王〟その単語を聞いた途端、適当に相槌を打っていた十六夜が初めて声を上げる。

「ま・・・・・マオウ⁉」

「魔王が敵なのかめんどいな」

瞳を輝かせる十六夜とは対象的に面倒くさいとがっかりする覇瑠徒だった。

「魔王！なんだよそれ、魔王って超カッコイイじゃねえか！箱庭には魔王なんて素敵ネーミングで呼ばれる奴がいるのか⁉」

「え、ええまあ。けど十六夜さんが思い描いている魔王とは差異があると・・・・」

「そうなのか？けど魔王なんて名乗るんだから強大で凶悪で、全力で叩き潰しても誰からも咎められることの無いような素敵で不適にゲスい奴なんだろ？」

「十六夜よ魔王は色々いるんだぞ、まあ俺は強大で凶悪な魔王の被害者なんだけどな、さらに言うと箱庭に来る前にずっと魔王と一緒にいたんだけどな。」

覇瑠徒の言葉はあまりにもぶっちゃけすぎていた。

7話　問題の解決

「ん、今なんて言いました？」
　黒ウサギは覇瑠徒が言った言葉を聞き逃した訳では無く、その言葉が普通では無かったからである。
「え、魔王と一緒に居たって言ったけど。」
「本当なのか覇瑠徒？」
「本当だけど、まず俺の居た世界の事を話すべきだったか」
「ああ、そうだな覇瑠徒の居た世界について教えてくれ。」
　そして覇瑠徒は話した自分が居た世界の事を、
　覇瑠徒の居た世界は箱庭と同じく神や悪魔そして獣人や亜人などあらゆる世界に存在する生き物がいる。逆に言えば存在しない物がいないんじゃないかって言う程
　色々な生物がいるのであった。
「へー面白そうだな覇瑠徒の世界は」
「そんな世界もあるんですね。」
「まあ、そういう事だな、てかこんな事してないでさっさと世界の果て見に行こうぜ。」

「話がそれてしまって私の話がまだ解決していないのですが」
「そうだったな、で何だっけ？」
「黒ウサギのコミュニティが魔王によって旗印と名前がないってところだな」
「けど名前も旗印も無いというには不便な話だな。何より縄張りを主張できないのは手痛いだろ。新しく作ったら駄目なのか？」
「か、可能です。ですが改名はコミュニティの完全解散を意味します。しかしそれでは駄目なのです！私達は何よりも仲間達が帰ってくる場所を守りたいのですから！」
「茨の道ではあります。けど私達は仲間が帰る場所を守りつつ、コミュニティを再建し何時の日か、コミュニティの名と旗印を取り戻して掲げたいのです。そのためには十六夜さんや覇瑠徒さん達のような強力な力を持つプレイヤーを頼るほかありません！どうかその強力な力、我々のコミュニティに貸していただけないでしょうか・・・・・!?」
「・・・・・ふぅん。魔王から誇りと仲間をねえ」
「こんな状況だからなあ」（あいつらの力を使えるようにしないとな）
深く頭を下げて懇願する。
（ここで断られたら・・・私達のコミュニティはもう・・・・・！）
黒ウサギは唇を強く噛む。こんな後悔をするなら、初めから話せばよかった。
肝心の十六夜は組んだ足を気だるそうに組み直し、たっぷり三分間黙り込んだ後、

「いいな、それ」
「・・・・・は？」
「ＨＡ？じゃねえよ。協力するって言ったんだ。もっと喜べ 黒ウサギ」
　不機嫌そうに言う十六夜。呆然として立ち尽くす黒ウサギは二度三度と聞き直す。
「え・・・・あ、あれれ？今の流れってそんな流れでございました？」
「そんな流れだったぜ。それとも俺がいらねえのか？失礼なこと言うと本気で余所行くぞ」
「だ、駄目です駄目です、絶対に駄目です！十六夜さんは私達に必要です！」
「よし、決まりだなさっさと見に行こうぜ世界の果てを」
「え？覇瑠徒さんは」
「俺は元々黒ウサギがどう言おうと黒ウサギのコミュニティに入るつもりだからな、それと言っておく俺は今よりももっと強くなる覚悟しておけよ黒ウサギ」
「はいわかりました！」

8話　悪を裁く理由

箱庭に来て数時間が経ち日が暮れた頃、覇瑠徒達は世界の果てを見て来て箱庭の内壁に入り噴水広場でジン・飛鳥・耀と合流した。

ジン達から話を聞いた黒ウサギがウサ耳を逆立てて怒っていた。

どうやら〝フォレス・ガロ〟のリーダーに喧嘩を売ったらしい。ましてやゲームの日取りが明日で敵のテリトリーでやるらしい。

「「ムシャクシャしてやった。今は反省しています」」

「黙らっしゃい!!!」

誰が言い出したのか、まるで口裏を合わせていたかのような言い訳に激怒する黒ウサギ。

それをニヤニヤと笑って見ていた十六夜と覇瑠徒が止めに入る。

「別にいいじゃねえか。見境なく選んで喧嘩売ったわけじゃないんだから許してやれよ」

「そうだよ負ける為に喧嘩を売ったわけじゃないだろうし」

「十六夜さんと覇瑠徒さんは面白ければいいと思っているかもしれませんけど、この

ゲームで得られるものは自己満足だけなんですよ？　この〝契約書類（ギアスロール）〟を見てください」

黒ウサギの見せた〝契約書類〟は〝主催者権限（ホストマスター）〟を持たない者達が〝主催者〟となってゲームを開催するために必要なギフトである。

そこにはゲーム内容・ルール・チップ・賞品が書かれており〝主催者〟のコミュニティのリーダーが署名することで成立する。黒ウサギが指す賞品の内容はこうだ。

「〝参加者が勝利した場合、主催者は参加者の言及する全ての罪を認め、箱庭の法の下で正しい裁きを受けた後、コミュニティを解散する〟　まあ、確かに自己満足だ。時間をかければ立証できるものを、わざわざ取り逃がすリスクを背負ってまで短縮させるんだからな」

「でも時間さえかければ、彼らの罪は必ず暴かれます。だって肝心の子供達は……その、」

「そう。人質は既にこの世にいないわ。その点を責め立てれば必ず証拠は出るでしょう。だけどそれには少々時間がかかるのも事実。あの外道を裁くのにそんな時間をかけたくないの」

箱庭の法はあくまで箱庭都市内でのみ有効なものだ。外は無法地帯になっており、様々な種族のコミュニティがそれぞれの法とルールの下で生活している。

そこに逃げ込まれては、箱庭の法で裁くことはもう不可能だろう。しかし〝契約書類〟による強制執行ならばどれだけ逃げようとも、強力なギアスでガルドを追いつめられる。

「俺は飛鳥に賛成だな、このゲームで得られるのは自己満足だけ？ゲームと言うのは自己満足の為にするものだと思うが、そして俺達はなんのコミュニティだ魔王を倒すんじゃなかたっけ？魔王を倒すコミュニティが人質はもういないとか時間で解決するとかそんな理由を付けて逃げるのか、正義を掲げるなら目の前の悪から倒そうぜ、飛鳥は負ける為に喧嘩を売ったのか？勝つためだろ」

「もちろん勝つに決まってるでしょ、それに私はあの外道が私の活動範囲内で野放しにされることも許せないの。」

「僕もガルドを逃がしたくないと思ってる。彼のような悪人は野放しにしちゃいけない」

ジンも同調する姿勢を見せ、黒ウサギは諦めたように頷いた。

「はぁ～……。仕方ない人達です。まあいいデス。腹立たしいのは黒ウサギも同じですし。覇瑠徒さんの言葉が正しいですし〝フォレス・ガロ〟程度なら十六夜さんと覇瑠徒さんがいれば楽勝でしょう」

「何言ってんだよ。俺は参加しねえよ？」

「当たり前よ。貴方なんて参加させないわ」
「俺も無理だな、相手が人ならともかく獣人だからなー俺今ただの人間だし」
フン、と鼻を鳴らす二人。黒ウサギは慌てて二人に食ってかかる。覇瑠徒は普通に無理と断言した。
「だ、駄目ですよ！御二人はコミュニティの仲間なんですからちゃんと協力しないと、それと覇瑠徒さんなんで普通に無理なんて言うんですか」
「そういうことじゃねえよ黒ウサギ」
十六夜が真剣な顔で黒ウサギを右手で制する。
「いいか?この喧嘩は、コイツらが売った。そしてヤツらが買った。なのに俺が手を出すのは無粋だって言ってるんだよ」
「あら、分かっているじゃない」
「俺は単純にあの時で使いすぎたから当分俺のギフトは使えない。」
「……。ああもう、好きにしてください」
丸一日振り回され続けて疲弊した黒ウサギはもう言い返す気力も残っていない。もうどうにでもなればいいと呟いて肩を落とすのだった。。

9話　違う世界と立ちはだかる壁（笑）

フォレス・ガロとのギフトゲームに十六夜と覇瑠徒が出ないと言ったあとジンは先に自分のコミュニティに帰った。

そして黒ウサギが〝サウザンドアイズ〟でギフトを鑑定すると言った。

「サウザンドアイズ？コミュニティの名前か？」

「ＹＥＳ。サウザンドアイズは特殊な瞳のギフトを持つ者達の群体コミュニティ。箱庭の東西南北・上層下層の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。幸いこの近くに支店がありますし」

「ギフト鑑定というのは？」

「勿論、ギフトの秘めた力や起源などを鑑定する事デス。自分の力の正しい形を把握していた方が、引き出せる力はより大きくなります。皆さんも自分の力の出処は気になるでしょう？」

同意を求める黒ウサギに四人は複雑な表情で返す。思う事はそれぞれあるだろうが、拒否する声はなく、黒ウサギ・十六夜・覇瑠徒・飛鳥・耀の五人と一匹は〝サウザンドアイズ〟に向かう。

道中、十六夜・覇瑠徒・飛鳥・耀の四人は興味深そうに街並みを眺めていた。
商店へ向かうペリベッド通りは石造で整備されており、脇を埋める街路樹は桃色の花を散らして新芽と青葉が生え始めている。
日が暮れて月と街灯ランプに照らされている並木道を、飛鳥は不思議そうに眺めて呟く。
「桜の木……ではないわよね？花弁の形が違うし、真夏になっても咲き続けているはずがないもの」
「いや、まだ初夏になったばかりだぞ。気合の入った桜が残っていてもおかしくないだろ」
「……？今は秋だったと思うけど」
「通常世界には帰って無かったからなこんな所で桜を見られるとは、といっても花に興味は無いな。」
ん？　っと噛み合わない四人は顔を見合わせ首を傾げる。黒ウサギが笑って説明した。
「皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されているのデス。元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系など所々違う箇所があるはずですよ」
「へぇ？パラレルワールドってやつか？」

「近しいですね。正しくは立体交差並行世界論というものなのですけども……今からコレの説明を始めますと一日二日では説明しきれないので、またの機会ということに」

曖昧に濁して黒ウサギは振り返る。どうやら店に着いたらしい。商店の旗には、蒼い生地にお互いが向かい合う二人の女神像が記されている。あれが〝サウザンドアイズ〟の旗なのだろう。

日が暮れて看板を下げる割烹着の女性店員に、黒ウサギは滑り込みでストップを、

「まっ」

「待った無しです御客様。うちは時間外営業はやってません」

……ストップをかける事も出来なかった。黒ウサギは悔しそうに店員を睨みつける。

流石は超大手の商業コミュニティ。押し入る客の拒み方にも隙がない。

「なんて商売っ気の無い店なのかしら」

「ま、全くです！閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」

「文句があるならどうぞ余所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です」

「出禁⁉これだけで出禁とか御客様舐めすぎでございますよ⁉」

「確かに閉店五分前に来たのが悪かった、だが今この店に用が有るのも事実――だからこの店に入れさせてくれ」

キャーキャーと喚く黒ウサギに何とか店に入るために頼みこむ覇瑠徒、だが店員は冷めたような眼と侮蔑を込めた声で対応する。
「なるほど、〝箱庭の貴族〟であるウサギの御客様を無下にするのは失礼ですね。中で入店許可を伺いますので、コミュニティの名前をよろしいでしょうか？」
「……う」
一転して言葉に詰まる黒ウサギ。しかし十六夜は何の躊躇いもなく名乗る。
「俺達は〝ノーネーム〟ってコミュニティなんだが」
「ほほう。ではどこのノーネーム様でしょう。よかったら旗印を確認させていただいてもよろしいでしょうか？」
ぐ、っと黙りこむ。黒ウサギが言っていた〝名〟と〝旗印〟がないコミュニティのリスクとはまさにこういう状況の事だった。
だが、覇瑠徒は限界だった、礼儀で自分達が悪かったと言ったにも係わらずここまで自分達を入れさせないかと怒りが頂点に達した、そして反撃を開始した。
「俺達ノーネームには名も旗印も無い、故店には入れないと？じゃあ仕方ない俺は壁を乗り越え先に進むことにしよう、覚悟しろ壁＝目の前にいる女性店員」
「いいでしょう完膚なきまでに叩きのめしてやろう、若造が!!!!」
黒ウサギ達は呆れた、言葉でどうにかしようとしていた覇瑠徒がいきなり喧嘩上等と

ばかりに女性店員に喧嘩を挑んだ、ましてや言葉巧みに自分達を追い返そうとした女性店員も喧嘩上等のようだ。

何がとは言わないが多分壁と言う言葉に悪意があったからだと思う。

今二つの悪と悪がぶつかろうとしている？

１０話　白夜叉

　覇瑠徒と女性店員の戦いは始まる前に終わりを迎えた。
「いぃぃぃやほおぉぉぉぉぉぉ！久しぶりだ黒ウサギイィィィィ！」
　黒ウサギが店内から爆走してくる着物風の服を着た真っ白い髪の少女に抱き（もしくはフライングボディーアタック）つかれ、少女と共に街道の向こうにある浅い水路まで吹き飛んだ。
「きゃあーーーーー……！」
　ボチャン。そして遠くなる悲鳴。
　覇瑠徒と十六夜達は眼を丸くし、店員は痛そうな頭を抱えていた。
「すまなかった店員、客としても態度が悪かった。」
　覇瑠徒はとんでもないものを見て平常心を取り戻し女性店員に謝った。
「案外あっさりと謝るのね、まあ店の前で揉め事をされても困りますけどね」
「あんなものを見た後で貴女と戦う気にはなれないからな。」
　女性店員と覇瑠徒の間では何事もなく終わった、だが十六夜が真剣な表情で
「……おい店員。この店にはドッキリサービスがあるのか？なら俺も別バージョンで是

非」
「ありません」
「なんなら有料でも」
「やりません」
真剣な表情でキッパリ言い切る女性店員。二人は割とマジだった。
フライングボディーアタックで黒ウサギを強襲した白い髪の幼い少女は、黒ウサギの胸に顔を埋めてなすり付けていた。
「し、白夜叉様⁉どうして貴女がこんな下層に⁉」
「そろそろ黒ウサギが来る予感がしておったからに決まっておるだろに！フフ、フホホフホホ！やっぱりウサギは触り心地が違うのう！ほれ、ここが良いかここが良いか！」
スリスリスリスリ。
「白夜叉様！ちょ、ちょっと離れてください！」
白夜叉と呼ばれた少女を無理やり引き剥がし、頭を掴んで店に向かって投げつける。
くるくると縦回転した少女を、覇瑠徒は体で受け止めた。
「懐かしいなこの感じ」
「飛んできた初対面の美少女を体で受け止めるとはおんしなかなかやるのう、おんし名はなんと言う？」

「覇瑠徒と言いますよ、よろしくお願いします白夜叉さん」
懐かしいと思いつつ笑顔で自己紹介する覇瑠徒。
一連の流れの中で呆気にとられていた飛鳥は、思い出したように白夜叉に話しかける。
「貴女はこの店の人？」
「おお、そうだとも。この〝サウザンドアイズ〟の幹部様で白夜叉様だよご令嬢。仕事の依頼ならおんしのその年齢のわりに発育がいい胸をワンタッチ生揉みで引き売れるぞ」
「オーナー。それでは売上が伸びません。ボスが怒ります」
何処までも冷静な声で女性店員が釘を刺す。
濡れた服やミニスカートを絞りながら水路から上がってきた黒ウサギは複雑そうに呟く。
「うう……まさか私まで濡れる事になるなんて」
「因果応報……かな」
悲しげに服を絞る黒ウサギ。
反対に濡れても全く気にしない白夜叉は、店先で覇瑠徒達を見回してニヤリと笑った。

「ふふん。お前達が黒ウサギの新しい同士か。異世界の人間が私の元に来たという事は……遂に黒ウサギが私のペットに」
「なりません！どういう起承転結があってそんなことになるんですか！」
ウサ耳を逆立てて怒る黒ウサギ。何処まで本気かわからない白夜叉は笑って店に招く。
「まあいい。話があるなら店内で聞こう」
「よろしいのですか？彼らは旗も持たない〝ノーネーム〟のはず。規定では」
「〝ノーネーム〟だと分かっていながら名を尋ねる、性悪店員に対する詫びだ。身元は私が保証するし、ボスに睨まれても私が責任を取る。いいから入れてやれ」
む、っと拗ねるような顔をする女性店員。彼女にしてみればルールを守っただけなのだから気を悪くするのは仕方がない事だろう。
「色々すまなかったな。」
覇瑠徒はそう言って店に入った。

１１話　ギフトネーム　前編

暖簾をくぐり店に入った覇瑠徒達は、店の外観からは考えられない、不自然な広さの中庭に出た。

正面玄関を見れば、ショーウィンドに展示された様々な珍品名品が並んでいる。

「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」

覇瑠徒達は和風の中庭を進み、縁側で足を止める。

障子を開けて招かれた場所は香の様な物が焚かれており、風と共に五人の鼻をくすぐる。

個室というにはやや広い和室の上座に腰を下ろした白夜叉は、大きく背伸びをしてから覇瑠徒達に向き直る。気がつけば、彼女の着物はいつの間にか乾ききっていた。

「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構えている〝サウザンドアイズ〟幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があってな。コミュニティが崩壊してからもちょくちょく手を貸してやっている器の大きな美少女と認識しておいてくれ」

「はいはいお世話になっております本当に」

投げやりな言葉で受け流す黒ウサギ。その隣で耀が小首を傾げて問う。
「その外門、って何？」
「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に強大な力を持つ者達が住んでいるのです」
此処、箱庭の都市は上層から下層まで七つの支配層に分かれており、それに伴ってそれぞれを区切る門には数字が与えられている。
外壁から数えて七桁の外門、六桁の外門、と内側に行くほど数字は若くなり、同時に強大な力を持つ。箱庭で四桁の外門となれば、名のある修羅神仏が割拠する完全な人外魔境だ。
黒ウサギが描く上空から見た箱庭の図は、外門によって幾重もの階層に分かれている。
その図を見た四人は口を揃えて、
「……超巨大タマネギ？」
「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら？」
「そうだな。どちらかといえばバームクーヘンだ」
「これはバームクーヘンだな、そう思うとバームクーヘンが食べたくなってきたわ」
うん、と頷き合う四人。身も蓋もない感想にガクリと肩を落とす黒ウサギ。

対象的に、白夜叉は呵々と哄笑を上げて二度三度と頷いた。
「ふふ、うまいこと例える。その例えなら今いる七桁の外門はバームクーヘンの一番薄い皮の部分に当たるな。さらに説明するなら、東西南北の四つの区切りの東側にあたり、外門のすぐ外は〝世界の果て〟と向かい合う場所になる。あそこにはコミュニティに所属していないものの、強力なギフトを持ったもの達が棲んでおるぞ――その水樹の持ち主などな」
白夜叉は薄く笑って黒ウサギの持つ水樹の苗に視線を向ける。白夜叉が指すのはトリトニスの滝を棲みかにしていた蛇神の事だろう。
「して、一体誰が、どのようなゲームで勝ったのだ？知恵比べか？勇気を試したのか？」
「いえいえ。この水樹は覇瑠徒さんがここに来る前に、蛇神様を素手で叩きのめしてきたのですよ」
自慢げに黒ウサギが言うと、白夜叉は声を上げて驚いた。
「なんと!?クリアではなく直接的に倒したとな!?ではその童は神格持ちの神童か？」
「ちょっとまて、その話で盛り上がるのはいいが色々語弊あるぞ黒ウサギ」
「えっそうでございましたか？」
「ああ、まずは俺一人で倒した訳じゃない、最初は十六夜が戦ってたし俺は最後に止めを刺しただけだ、それに黒ウサギ見てただろ俺は殴って倒した訳じゃない衝撃を放って倒

したんだ。」
「その方が凄いじゃないですか！」
「あの時は危なかったな俺も巻き込まれるところだったわ」
「それはすまなかった、あんなのがでるとは思わなかった。」
　覇瑠徒は右手を軽く振っただけなのにああなるとは思いもしなかったと後悔し（次会ったら謝ろう）と蛇神に思った。
「まあ、過程はどうであれ蛇神を倒したのは変わりないからのう、覇瑠徒は中々の神格の持っているのだな」
「そんな大層な物じゃないと思うけどな」
「いや、凄いのですよ私は見ましたよ蛇神様を倒すとき神々しい気を纏っているのを」
「だが、あの蛇神を倒したとなると蛇神が持っていた神格と同等もしくはそれ以上の物を持っているか、お互いの種族によほど崩れたパワーバランスがある時だけのはず。種族の力でいうなら蛇と人ではドングリの背比べだぞ」
　神格とは生来の神様そのものではなく、種の最高のランクに体を変幻させるギフトを指す。
　蛇に神格を与えれば巨躯の蛇神に。
　人に神格を与えれば現人神や神童に。

鬼に神格を与えれば天地を揺るがす鬼神と化す。
更に神格を持つことで他のギフトも強化される。
「白夜叉様はあの蛇神様とお知り合いだったのですか？」
「知り合いも何も、アレに神格を与えたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話だがの」
小さな胸を張り、呵々と豪快に笑う白夜叉。
だがそれを聞いた十六夜は物騒に瞳を光らせて問いただす。
「へえ？じゃあオマエはあのヘビより強いのか？」
「ふふん、当然だ。私は東側の〝階層支配者（フロアマスター）〟だぞ。この東側の四桁以下にあるコミュニティでは並ぶ者がいない、最強の主催者なのだからの」
〝最強の主催者〟　その言葉に、十六夜・覇瑠徒・飛鳥・耀の四人は一斉に瞳を輝かせた。
「そう……ふふ。ではつまり、貴女のゲームをクリア出来れば、私達のコミュニティは東側で最強のコミュニティという事になるのかしら？」
「無論、そうなるのう」
「遣り甲斐がありそうだな」
「そりゃ景気のいい話だ。探す手間が省けた」
四人は剥き出しの闘争心を視線に込めて白夜叉を見る。白夜叉はそれに気づいたよ

うに高らかと笑い声をあげた。
「抜け目ない童達だ。依頼しておきながら、私にギフトゲームで挑むと？」
「え？ちょ、ちょっと御四人様!?」
慌てる黒ウサギを右手で制す白夜叉。
「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている」
「ノリがいいわね。そういうの好きよ」
「ふふ、そうか。――しかし、ゲームの前に一つ確認しておく事がある」
「なんだ？」
白夜叉は着物の裾から〝サウザンドアイズ〟の旗印――向かい合う双女神の紋が入ったカードを取り出し、壮絶な笑みで一言、
「おんしらが望むのは〝挑戦〟か――もしくは、〝決闘〟か？」

１２話　ギフトネーム　中編　上

「おんしらが望むのは〝挑戦〟か――――もしくは、〝決闘〟か？」

刹那、四人の視界に爆発的な変化が起きた。

四人の視覚は意味を無くし、様々な情景が脳裏で回転し始める。

脳裏を掠めたのは、黄金色の穂波が揺れる草原。白い地平線を覗く丘。森林の湖畔。

記憶にない場所が流転を繰り返し、足元から四人を？みこんでいく。

四人が投げ出されたのは、白い草原と凍る湖畔――――そして、水平に太陽が廻る世界だった。

「……なっ……!?」

余りの異常さに、覇瑠徒達は同時に息を呑んだ、そして覇瑠徒は思った。

（これが箱庭、いや違うこれはまだ箱庭の一つでしか無い、他にもこれと同等もしくはそれ以上の事がある）のだと。

箱庭に招待された時とはまるで違うその感覚は、もはや言葉で表現出来る御技ではない。

遠く薄明の空にある星は只一つ。緩やかに世界を水平に廻る、白い太陽のみ。
まるで星を一つ、世界を一つ創り出したかのような奇跡の顕現。
唖然と立ち竦む三人、そして笑みを浮かべた覇瑠徒に今一度、白夜叉は問いかける。
「今一度名乗り直し、問おうかの。私は〝白き夜の魔王〟――――太陽と白夜の星霊・白夜叉。
おんしらが望むのは、試練への〝挑戦〟か？それとも対等な〝決闘〟か？」
魔王・白夜叉。少女の笑みとは思えぬ凄味に、再度息を呑む三人そして続けて思う覇瑠徒。
（これくらいでどうこう思っていたら限がない）
覇瑠徒こんな事を思うのは覇瑠徒が飛鳥・耀そして十六夜よりも特殊な環境の世界に居たからであろう。
〝星霊〟とは、惑星級以上の星に存在する主精霊を指す。妖精や鬼・悪魔などの概念の最上級種であり、同時にギフトを〝与える側〟の存在でもある。
十六夜は背中に心地いい冷や汗を感じ取りながら、白夜叉を睨んで笑う。
「水平に廻る太陽と……そうか、白夜と夜叉。あの水平に廻る太陽やこの土地は、オマエを表現してるってことか」
「如何にも。この白夜と湖畔と雪原。永遠に世界を薄明に照らす太陽こそ、私がもつ

ゲーム盤の一つだ」
　白夜叉が両手を広げると、地平線の彼方の雲海が瞬く間に裂け、薄明の太陽が晒される。
〝白夜〟の星霊。十六夜の指す白夜とは、フィンランドやノルウェーといった特定の経緯に位置する北欧諸国などで見られる、太陽が沈まない現象である。
　そして〝夜叉〟とは、水と大地の神霊を指し示すと同時に、悪神としての側面を持つ鬼神。
　数多の修羅神仏が集うこの箱庭で、最強種と名高い〝星霊〟にして〝神霊〟。
　彼女はまさに、箱庭の代表ともいえるほど――強大な〝魔王〟だった。
「これだけ莫大な土地が、ただのゲーム盤……!?」
「如何にも。して、おんしらの返答は？〝挑戦〟であるならば、手慰み程度に遊んでやる。――だがしかし〝決闘〟を望むなら話は別。魔王として、命と誇りの限り闘おうではないか」
「……っ」
　飛鳥と耀、そして自信家の十六夜でさえ即答できずに返事を躊躇った、だが覇瑠徒だけは違った。
　白夜叉が如何なるギフトを持つかは定かではない。だが覇瑠徒はだからこそ、お互い

がお互い全く知らないからこそ、相手の力を自分の強さを知りたかった。

そして言い放った。

「その〝決闘〟乗った!!……」

１３話　ギフトネーム　中編　下

「その〝決闘〟乗った!!……って言いたいけど生憎今、
　　俺神格とか使えないんだよ、エネルギー切れって感じで」
「ふむ?神格を使えない。容量があるのか覇瑠徒の神格は?」
「まあ、今はそんな感じ、しかも　もし今使えたとしても全力は出せないからボコボコにされると思う、だから今は試練で頼む。でも　もう少し経って俺が持つギフトをすべてを出し切れるようになったら、その時は〝決闘〟を頼む白夜叉」
「分かったその時まで楽しみに待っておるぞ覇瑠徒」
　白夜叉は久々に楽しみが出来たと心の中で思った。
　また、覇瑠徒も結局自分が全力を出しても、白夜叉に勝てるのかと今更ことを思い少しばかり後悔ができた。
　そんな、やり取りを見ていた十六夜は諦めたように笑い、ゆっくりと挙手し、
「参った。やられたよ。降参だ、白夜叉」
「ふむ?それは決闘ではなく、試練を受けるという事かの?」
「ああ。これだけのゲーム盤を用意出来るんだからな。アンタには資格がある。――――

いいぜ。今回は黙って試されてやるよ、魔王様」
苦笑と共に吐き捨てるような物言いをした十六夜を、白夜叉は堪え切れず高らかと笑い飛ばした。
白夜叉が笑ってる中、覇瑠徒は十六夜に向かって言った、
「十六夜そんな事、言ってたら俺が先に白夜叉を倒しちゃうぞ」
「なんだと、そういう事ならまずは俺と覇瑠徒どっちが強いか決める決闘をするか」
「それはいいな、そして勝った方が先に白夜叉と決闘をするってことで、まあでも今すぐは無理だからな」
「ああそりゃ勿論、ましてや今は全力を出せないんだろ、それはつまらないからな覇瑠徒いつかが全力を出せるときまで待ってやるよ」
「それは有り難い」
覇瑠徒と十六夜どっちが強いか決めるために決闘をするという、覇瑠徒と十六夜以外どうでもいい約束をしていたら、
一頻り笑った白夜叉は笑いを噛み殺して他の二人にも問う。
「く、くく……して、他の童達も同じか？」
「……ええ。私も、試されてあげてもいいわ」
「右に同じ」

苦虫を噛み潰したような表情で返事をする二人。満足そうに声を上げる白夜叉。
一連の流れをヒヤヒヤしながら見ていた黒ウサギは、ホッと胸をなでおろす。
「も、もう！お互いにもう少し相手を選んでください！〝階級支配者〟に喧嘩を売る新人と、新人に売られた喧嘩を買う〝階級支配者〟なんて、冗談にしても寒すぎます！それに白夜叉様が魔王だったのは、もう何千年も前の話じゃないですか!!」
「何？　じゃあ元・魔王様ってことか？」
「えっ、元魔王なの」
「はてさて、どうだったかな？」
ケラケラと悪戯っぽく笑う白夜叉。ガクリと肩を落とす黒ウサギと四人。
その時、彼方にある山脈から甲高い叫び声が聞こえた。獣とも、野鳥とも思えるその叫び声に逸早く反応したのは、春日部耀だった。
「何、今の鳴き声。初めて聞いた」
「ふむ……あやつか。おんしら四人を試すには打って付けかもしれんの」
湖畔を挟んだ向こう岸にある山脈に、チョイチョイと手招きをする白夜叉。すると体長５ｍはあろうかという巨大な獣が翼を広げて空を滑空し、風の如く四人の元に現れた。
鷲の翼と獅子の下半身を持つ獣を見て、春日部耀は驚愕と歓喜の籠った声を上げた。

「グリフォン……嘘、本物!?」
「フフン、如何にも。あやつこそ鳥の王にして獣の王。〝力〟〝知恵〟〝勇気〟の全てを備えた、ギフトゲームを代表する獣だ」
「へえ、グリフォンか」
白夜叉が手招きする。グリフォンは彼女の元に降り立ち、深く頭を下げて礼を示した。
「さて、肝心の試練だがの。おんしら四人とこのグリフォンで〝力〟〝知恵〟〝勇気〟の何れかを比べ合い、背に跨って湖畔を舞う事が出来ればクリア、という事にしようか」
白夜叉が双女神の紋が入ったカードを取り出す。すると虚空から〝主催者権限〟にのみ許された輝く羊皮紙が現れる。白夜叉は白い指を奔らせて羊皮紙に記述する。

『ギフトゲーム名　〝鷹獅子の手綱〟
・プレイヤー一覧　逆廻　十六夜
　　星導　覇瑠徒
　　久遠　飛鳥
　　春日部　耀
・クリア条件　グリフォンの背に跨り、湖畔を舞う。

・クリア方法　〝力〟〝知恵〟〝勇気〟の何れかでグリフォンに認められる。
・敗北条件　降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。
宣誓　上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

〝サウザンドアイズ〟印』

「私がやる」

読み終わるや否やピシ！と指先まで綺麗に挙手をしたのは耀だった。彼女の瞳はグリフォンを羨望の眼差しで見つめてる。比較的に大人しい彼女にしては珍しく熱い視線だ。

「ふむ。自信があるようだが、コレは結構な難物だぞ？失敗すれば大怪我では済まんが」

「大丈夫、問題ない」

耀の瞳は真っ直ぐにグリフォンに向いている。キラキラと光るその瞳は、探し続けていた宝物を見つけた子供のように輝いていた。隣で呆れたように苦笑いを漏らす十六夜と覇瑠徒と飛鳥。

「ＯＫ、先手は譲ってやる。失敗するなよ」

「頑張れよ、耀」

「気を付けてね、春日部さん」
「うん頑張る」
その時だった、覇瑠徒の足元に魔法陣が現れて、十六夜の隣にいた覇瑠徒が消えたのは、

１４話　ギフトネーム　後編

　覇瑠徒は何者かの魔法陣で白夜叉が出したゲーム盤から消えた後不思議な感覚にあっていた、それは全身の感覚が一切無く頭の中で流れている映像を誰かの視点から観ているようだった。
　それは一面真っ白い世界だった。覇瑠徒が観ている視点では目の前に自分に似た者いて視点主と話し合っている所だった。
「オマエは俺に勝てない、始めから分かっていたのに何故俺に挑む？」
「勝てない……か、その言葉はお前の悪い所の一つだお前がどれだけ強かろうが上には上がいるものだ、そして俺もその一人……お前より上の存在だ」
「は？　何を言っている？　そんな戯言俺に勝ってから言えよ」
「お前に勝つから言ったのだが理解出来なかったか？」
「まあでも、俺が勝とうがお前が勝とうがどっちでもいい、どうせもう外では始まっている
　世界の終わりが」

その言葉で映像は消え不思議な感覚無くなった、覇瑠徒はそれで見たものが何なのか自分の記憶の中を探し始めた。

そして一つの答えが出た、それは明確ではないが過去に自分が実際にみたことだった。

＊＊＊

不思議な感覚で観たものの答えが出た後、今度は別の感覚変わったそれはさっきとは違い全身を動かせる状態だった、なので覇瑠徒は目を開け今何処にいるのか確認した。

目を開けた覇瑠徒が感じたものは驚きだった。覇瑠徒が見たものは何処までも晴れ渡る青空と一面が風で揺らいでる草原のある世界だった。

そして一言

「此処どこだよー」

覇瑠徒には身に覚えのない所だった。

少し悩み、ここから見えないだけで歩けば何かあるかもと思い歩き始めた刹那、覇瑠徒の目の前に魔法陣が現れたしかもそれは自分がここに来た時に足元にあったのと同じ物だった。

そして魔法陣から何かが出てきた。

「覇瑠徒様此処には草原しか無いですよ」

魔法陣から出て来た女の人？は笑顔そう言った。
覇瑠徒は考えた、十六夜達と一緒では無く自分だけをこの世界移動させた事、それは自分にだけ関係がある人、それは覇瑠徒は知ってる可能性があるという事、しかし幾ら記憶の中を探しても目の前の人は記憶には無かった。
「お前だれ？」
覇瑠徒の言葉で目の前にいる女性は額に手を当て、呆れた顔をし自己紹介を始めた。
「はぁ、まあ約二年間会って無かったですから今回は仕方ないです、では覇瑠徒様は忘れてしまったようなので改めて自己紹介しましょう、私はアークト様の命により覇瑠徒様の使役を任された雷精霊イーラと申します以後お見知りおきを、あと使役と言ってもやることはメイドみたいなものですけどね」
「アークト、使役、精霊、イーラ、情報量が多いなおい、……えっとまずアークトはあいつの事だろうな次に使役というよりもメイドみたいなもの、あと精霊だったのかまあ人間っぽく無かったからな、最後に名前がイーラと言うのかイーラ？……ああ!!!」
ああ!!!とイーラと言う存在を思い出し大声を上げた、と同時に覇瑠徒の記憶にあるイーラとは姿が違うと思い悩んだ。
それも当然、覇瑠徒の記憶の中にあるイーラとは手のひらサイズの小さな精霊だった、対して今覇瑠徒の目の前にいるイーラは背は覇瑠徒より少し高く髪は腰位まであり

バリボーな体形をしていたからである。
故に覇瑠徒はイーラに訊いた。
「お前、大きくなり過ぎじゃね？」
「えっ、ああそうですね二年間の間に色々ありましたから、それよりやっと思い出しましたか」
覇瑠徒がやっと思い出した事に安心イーラだったが二年前とは明らかに違う姿を色々と言う言葉で解決していいのかと悩む覇瑠徒だった。
「……で、色々訊きたい事があるけど先ずは此処どこ？」
「ああ、ここは幻想空間と呼ばれる異空間でございます」
「なんで俺をこの異空間に？」
「はい、それはですね覇瑠徒様が箱庭と言う世界に来たことにより出来た問題が色々ありまして、それについて話しておこうと思いまして」
「……まあそうだよな、そりゃ俺があの世界から消えたら問題も色々できるよな」
やはり何も言わず箱庭に来たのは不味かったと思う覇瑠徒だが、
「ちょっと待て、イーラは何処から来たんだ？」
「えっ私ですか、私は元々覇瑠徒様の中にいましたよ」
「じゃあ何で最初から俺の前に現れなかったんだ？」

「恥ずかしながら、私は覇瑠徒様が箱庭行くまで眠っておりまして目が覚めたら、覇瑠徒様の目の前に大きな蛇がいたので慌てて外に出れる準備をしまして今このような状況になっております。」

覇瑠徒はイーラがメイドと言う立場でありながら、さっきまでずっと寝ていたと言う事に戸惑いながらも蛇神と戦っているのを見ていた事を思い、

「イーラ、俺があの蛇神の所から見ていたと言う事はあいつらと同じ所に居るのか？」

「はい、覇瑠徒様があのような事態になった時からレーゼウさん達と同じ所に住んでいます。」

「分かった、……話を戻すがどんな問題が出たんだ」

「単刀直入に言いますと覇瑠徒様が彼方の世界から消えて箱庭に来たので彼方の世界の方達が覇瑠徒様のことを探していると思います、なので何れ彼方の方々が箱庭に来るかと」

「そっかぁ、あいつらならやり兼ねないな……まあでもすぐ来るわけじゃないと思う…多分、だからその時はその時だ」

「では、その時はその時ということで、……もっと色々言いたい事があるのですが十六夜様方がやっていたギフトゲームが終わったみたいなので続きはまた今度で」

「十六夜達って、……ああ!!!　こんな事になったがどう説明すれば」

「それならご安心ください、覇瑠徒様が私の魔法陣で消えた後、私が彼方に行き白夜叉様や十六夜様方に粗方説明しましたので大丈夫でございます。」
「そういう事なら大丈夫か、じゃあ続きはまた今度という事で元いた場所に戻してくれ」
「はい、わかりました。では元いた場所に」
再び覇瑠徒の足元に魔法陣が現れ、イーラの目の前にいた覇瑠徒が消えた。

＊＊＊

次の瞬間、覇瑠徒の目の前に見覚えのある人達がいた、元いた場所に戻って来たんだと一安心し十六夜達のほうに歩いて行った。
「戻ってきたがギフトゲームはどうなった?」
その言葉が聞こえたと同時にその場にいたみんなが覇瑠徒の方を向いた。
「おっ帰ってきたか覇瑠徒、凄かったぜ春日部」
「と言う事は買ったんだな耀は」
「うん、何とか勝利」
「危なかったけど、凄かったわあの時の春日部さん」
「最後の最後までひやひやしましたが、まさか最後に飛翔するとは黒ウサギ思いもしなかったですヨ」

「丁度良い所で帰って来たな覇瑠徒、さっきの続きを話すぞ、何にせよ〝主催者〟として、星霊のはしくれとして、試練をクリアしたおんしらには〝恩恵〟を与えねばならん。ちょいと贅沢な代物だが、コミュニティの復興の前祝としては丁度よかろう」

白夜叉がパンパンと柏手を打つ。すると四人の眼前に光り輝く四枚のカードが現れる。

カードにはそれぞれの名前と、体に宿るギフトを表すネームが記されていた。

コバルトブルーのカードに逆廻十六夜・ギフトネーム〝正体不明（コードアンノウン）〟

ワインレッドのカードに久遠飛鳥・ギフトネーム〝威光（いこう）〟

パールエメラルドのカードに春日部耀・ギフトネーム〝生命の目録（ゲノム・ツリー）〟〝ノーフォーマー〟

パール・グレイのカードに星導覇瑠徒・ギフトネーム〝神の素質（ゴッドアプティテュード）〟〝魔王の素質（サタンアプティテュード）〟

と書かれていた。